

シンポジウム

『これからの歯科衛生士を考える』
「歯科衛生士—今 そして これから—」

三 富 純 子

(日本歯科大新潟歯学部附属病院)

教育とは、教えることであるが、われわれも学生から学ぶことは多い。しかし少し不器用な臨地実習中の学生たちと接していると、どうしても口より先に手を出したくなってしまう。そこに受診中の患者さんがいると、優先順位はやはり患者さんなのである。心身共に癒しを求めているので、診療室から少しでも早くに退散したいであろう心の思いを汲み取り、スムーズに診療が進むよう前準備から片づけまでシミュレーションしながら診療補助に就く。しかし高齢者の方の中には、日頃独居のため人との会話を非常に楽しみにしておられる方も多くいる。どんな場合でも、患者さんの心や気持ちを瞬時につかむことが重要となっているのである。コミュニケーションを深めるためには、初めて同士の場合会話や対話が重要であると思う。現在コミュニケーションをとる行為のひとつにメールなどが利用されている。時として便

利であるが、顔と顔を見せ合って行う言葉のキャッチボールのほうが歯科衛生士には必要だと思う。

歯科医師の立場で求める歯科衛生士像と、患者の立場で求める歯科衛生士像の間で隔たりを無くすることで歯科衛生士の関わる医療サービスの提供が認めてもらえるのではないだろうか。認められたそのときは患者さんが診療終了後「ありがとう」と声をかけてくれるに違いない。

医療サービス提供のため歯科衛生士は、アンテナを十分に張り巡らし適確な情報を収集しなければならない。その情報の善し悪しの分類ができ先を読むには、本を読み、新聞を読み、自らの資質向上のため投資することも重要である。そのことに気付くまで私は随分年月がかかりましたが、皆さんはどうですか？

広がりゆく歯科衛生士
—「歯科衛生士」を伝えていく力—

隅 田 好 美

(新潟大学歯学部口腔生命福祉学科)

歯科衛生士を取り囲む環境が大きく変化するとともに、歯科衛生士に求められることが増加し、より高度になってきている。それに伴って歯科衛生士も変わり続ける必要があり、努力もしてきた。しかし、残念ながら他の医療職や福祉職、患者や家族に「歯科衛生士にどのような力があるのか」ということが、すべて理解されているとはいい難いと思われる。

他職種との連携の必要性は自明のことであるが、他職種に「歯科衛生士の力」が理解されていなければ、本当の意味での連携を求められない可能性がある。また、歯科衛生士が他職種（特に福祉職）や患者や家族の「視点」を理解していることで、初めて相手に受け入れられる、より強固な「連携」を行うことが可能になると考える。

シンポジウムでは、私自身の歯科衛生士と社会福祉士の経験を踏まえ、①社会福祉の視点から見た口腔ケアの意義、②社会福祉の視点から見た歯科衛生士としての介入、③4年生教育における可能性について述べる。ソーシャルワークでは、「人—環境の相互作用」「生活の視点」「主観的ニーズ」を重視する。このような社会福祉の視点を、歯科衛生士としての「考え方」や「関わり方」に応用することで、歯科衛生士としても「広い視野」をもつことができた。

このようなことを踏まえながら、これからの「歯科衛生士の広がりゆく可能性」や、他職種や患者、家族にどのように『歯科衛生士』を伝えていくことが必要なのかを、一緒に考えていきたい。